

大雨に係る農作物技術対策

平成21年(2009年)7月1日

農業振興課

水稻

1 大雨・冠水時の対策

(1) 排水

できるだけ排水に努め、少しでも早く葉先が水面上に出るようにする。

(2) 水温の上昇防止

高水温、濁水状態が被害を大きくするので、水温の低下と濁水の清水化を図る。

(3) 濁水の停滞したほ場

排水後、清水に入れ替える。

(4) 冠水田の水管理

冠水した稲は体内水分を失いやすいので、急に落水せず徐々に浅水とし、酸素供給のため、できるだけ新しい水と入れ替える。

(5) 付着した泥の除去

冠水時に泥等が付着した場合には、光合成や呼吸の妨げとなるので、清水で洗い流す。

2 土砂流入、流失田での対策

(1) 土砂流入田、稲株埋没田

稲が深植え状態となり、酸素不足等による生育遅延が起こる。従って、可能な限り土砂の搬出を行う。

2段根の出る恐れのあるものには、少量の窒素追肥を早めに行い、泥土が流入しているものは追肥を控える。

(2) 土砂流出田、稲株流失田

土砂が流失したほ場は、肥料を分施する。リン酸、カリ肥料を増やし、場合によってはケイ酸肥料を施用する。

移植限界内であれば植え替えをするが、基肥の量は普通栽培の50%以下で、活着を促進する程度にとどめる。栽植密度は1～2割密植とする。

3 病害防除

(1) 冠水した稲は白葉枯病等が発生しやすくなるので、減水後薬剤散布する。

(2) 長雨・日照不足が続く場合には、いもち病が発生しやすくなるので防除する。特に、早期栽培では紋枯病に注意する。

大豆

1 第1本葉期以降の浸水・冠水への対策

(1) 浸水・冠水後の生育

第1本葉期以降になると、冠水による枯死株の発生は少なくなる。通常第1本葉が展開する頃から根粒菌が着生してくるが、土壌の通気性が悪いと根粒菌が着生できず、葉色が黄化するなど生育が抑制される。

この頃になると、雑草もかなり大きくなっていくので、除草が必要になってくる。

(2) 対策

ほ場の排水に努める。

ほ場に入れるようになったら、できるだけ早く中耕・培土作業を行う。培土の高さは大豆株元の雑草を覆うために、初生葉節前後とする。

曇雨天候が続く、中耕・培土ができない場合で、イネ科雑草が多発した場合は、イネ科雑草用の除草剤を適期散布する。

野菜

1 根群の生育回復

- (1) ほ場の周囲に明きょや排水溝を掘って、ほ場外への速やかな排水に努める。
- (2) 畦間の滞水によりポリマルチをした畦内が過湿状態になった場合は、マルチをめくって土壌を乾かし、畦内の通気性を高める。
- (3) 根が洗われて露出したり、株元がぐらつくものは軽く土寄せを行う。
- (4) 雨でたたかれて土が固く締まった苗床やほ場では、ある程度乾いてから軽く中耕を行う。
- (5) 一時的な水分過多により根が地表面に多くなると、水害後の高温・乾燥害を受けやすくなるので、土壌が適湿になり次第、通路の土を根元に寄せて敷きワラを行う。
- (6) 土砂が流入し株元が埋まった場合には、土砂を除去したり、流入堆積した表土が乾いて固くならないうちに中耕して通気を良くし、乾燥を促すようにする。

2 地上部の生育回復

- (1) 葉や茎に泥が付着している場合は光合成を阻害するので、病害防除を兼ねて、できるだけ早めに野菜の種類に応じて登録のある殺菌剤を散布し、泥を洗い落とす。特に、イチゴやダイコン等の幼植物は芯部の泥を丁寧に洗い流すようにする。
- (2) 果菜類の場合は、特に開花成熟期に入ったものは被害が大きい。草勢の衰弱した株では、果実の若どりや摘果(花)を行い、草勢の回復を図る。過繁茂した茎葉は間引きせん定を行い、下葉や病葉を除去して通風をよくするなどして地上部の負担をできるだけ軽減する必要がある。
- (3) 根が衰弱し養分吸収機能が低下すると、肥切れ状態や微量要素欠乏を起

こしやすくなるので草勢の回復を図るため、必要に応じて尿素(0.5%液)や葉面散布剤を散布する。

トマトやピーマンのように石灰欠乏(尻腐れ)を起こしやすいものでは、塩化カルシウムの200~300倍液を定期的に散布する。また、ナス、トマトなどで発生しやすい苦土欠乏症には、硫酸マグネシウムの60~100倍液を定期的に葉面散布したり、硫酸マグネシウムを10a当たり20~30kg土壤施用して防止に努める。

- (4) 病害の多発が予想されるので、病害の早期防除に努める。施設野菜では、ハウス内が過湿にならないよう換気に努める。

3 作付けのやり直し

強度の浸水・冠水により生育の立ち直りが期待できない場合には、できるだけ早く播き直しを行うか、他の作目に作付け転換することも必要である。

この場合、適応作目及び品種の選択と生育促進のための管理技術を適切に行うことが大切である。特に、品種選択に当たっては適地性と市場動向を十分考慮する必要がある。

花き

1 排水対策

- (1) 露地花きでは、畦間に滞水しないように明きよの溝上げを徹底し、速やかにほ場外に排水できるようにする。
- (2) 施設花きでは、ハウス内に浸水しないようにハウス周囲に明きよや排水溝を設置する。

2 病害対策

- (1) 降雨が続くとキクでは黒斑病、ユリ類・リンドウでは葉枯病が発生しやすくなるので、雨上がりには防除を徹底する。降雨が続き、病害が蔓延を始めるようであれば、雨の止み間に防除を行う(雨間、雨中散布)。
- (2) 施設栽培では灰色かび病などの発生が多くなるので防除を徹底する。水和剤等はハウス内の湿度を上げるので、登録のある燻煙剤を利用する。

3 ハウス施設内の高湿度対策

- (1) 施設花きでは、湿度が高くなると、病害の発生、軟弱な生育が多くなるので換気の徹底や循環扇、加温機を利用して湿度低下に務める。
- (2) 不要な枝梢や下葉を取り除き、通風を良くする。

果樹

1 排水対策

長雨による土中の酸素不足で、根痛みが懸念されることから、排水溝を掘り上げ、雨水を効率よく園外に排出する等、排水対策を徹底する。

特に幼木では、梅雨明け後の急激な乾燥にも対応できるよう、根痛みを起こさ

ないように特に注意する。

2 新梢管理による日照改善

日照不足による果実肥大不良、品質低下が懸念されるため、新梢の誘引やシルバーマルチ等による樹冠内の日照改善を図る。

3 適正結果量の確保

果実肥大不良や生理落果過多が懸念されるので、生理落果等の推移を見ながら、適正結果量の確保に努める。

4 病害防除

カンキツの黒点病、ナシの黒斑病、ブドウの黒痘病等、病害防除を的確に行う。

5 生理障害への対応

ナシの水浸状果等の生理障害の発生が懸念されるので、的確な対応が出来るよう注意する。

6 水害への対応

- (1) 浸水園では早めに排水に努めるとともに、流入堆積土のある場合は早期に除去する。
- (2) 根が露出している場合は早急に覆土する。
- (3) 樹体に付着した泥は速やかに洗い落とす。